

ワークショップでの意見まとめ

ワークショップ1

議題 自然配偶子由来のヒト胚と、ヒト iPS 細胞等から作成した配偶子由来のヒト胚は同じか？それとも違うか。また、その扱いは、どちらも同じように尊重すべき存在か？それとも違うか？

意見のまとめ

とらえ方

	主観的		
✓ 人工であっても大切な生命の萌芽	✓ 人の手が入っている	同じ	異なる
✓ 過程は違って最後はヒトになる	✓ 重みが違う (人工 < 自然)		
✓ 細胞レベルで考えれば、同じもの	✓ 生物学上、全く同じとは言えない	客観的	では
✓ 将来同一のものになる	✓ 遺伝子変質などのリスクがあるの		

扱い方

尊重すべき	そうではない
✓ 将来人になりうるものだから	✓ iPS 細胞由来のものは作成過程が工業的だから、あくまで研究材料
✓ iPS 細胞由来だからといって、扱いが雑にならないよう注意すべき	✓ ヒトの素ではあるがヒトではない

議論のなかで見つかった課題

- ✓ 双方を、何を以て「同じ」とするかの定義・基準が必要ではないか。
- ✓ 双方が同じであるか、またはリスクがあるかどうかは、研究を進めないと（胚を成長させないと）分からない。しかし、その過程や結果において固体（ヒト）にリスクが生じうるという矛盾・ジレンマがある。
- ✓ どこからがヒトかという定義があって初めて、尊重の度合いが変わるのではないか。
- ✓ 尊重の仕方・程度や、対象となる期間の基準が必要ではないか。

その他意見

- ✓ 人工受精自体が自然の摂理に逆らっているのではないか。
- ✓ マウスでは既に研究用受精が行われているのに、人間の場合だけこのような倫理的課題を議論するのはなぜか。
- ✓ 自然受精であっても遺伝子変異によるリスクは起こってきたのに、人工授精の場合だけ特別な見方をするのはナンセンスだ。

ワークショップ2

議題

ヒト iPS細胞等から作成した配偶子由来のヒト胚を作成し、利用してよいのか。よいとすれば、その範囲や目的はどのようなか。

目的	肯定的な意見	否定的な意見
医療行為	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 不妊治療ならよい。 ✓ 遺伝子変異に起因する病気を予防する目的ならよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 母体への移植はやめておいたほうがよい。 ✓ 母体に入れた後に異常が分かった場合どうするのか。 ✓ 不妊治療を含め、人工授精によって生まれてくる子の幸せは本人にしか分からない。 ✓ 一般的にメリットと言われることがその子にとって本当にメリットなのか分からない。
研究利用	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 基礎研究に用いるのならよい。 ✓ 利用してよい期間を定めるべき（適当な期間は分からない）→その期間内であれば、いかなる目的も可としてはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 失敗したときの対策ができる範囲内で研究利用を進めるべきではないか。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 新しい可能性が広がる（同姓同士が子どもを持てるなど） ✓ 生まれてくるヒトに起こりうるリスク等がある程度分かるようになったら、誕生させることもよいのではないか。 ✓ 受精した時点で生命の萌芽であるから、利用してよい期間（＝ヒトでないと捉える期間）を定めることは無意味である。利用してよいとするなら、母体への移植も可とするべきだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ ヒトの大量生産・生物兵器の生産に応用されることがあってはならない。 ✓ 本人が社会的不利益を被らないようにするべきだ。（臓器提供のみを目的に誕生させられる等） ✓ 母子にとって身体的・精神的に安全でなければならない。 ✓ 生まれた子どもに対して一体だれが責任を負うのか。決定した親か、許容した社会か。 ✓ 人間観の崩壊を招く。
	<ul style="list-style-type: none"> ✓ ヒト iPS細胞由来の生殖細胞を用いた人工授精の技術が確立されたら、研究利用のためのそれと不妊治療のためのそれをどう区別するのか、基準が必要である。 ✓ 世代によって幸福の捉え方が違うため、いろいろな世代・立場の人の意見を聞いたうえで方針を決めていくべきだ。 	

講師・オブザーバからのフィードバックコメント

齋藤 氏

今回のワークショップのなかで、専門家が議論するような内容がいろいろな角度から出尽くしたように思う。いかに蒲郡市が先進的かということである。

かつての社会は、白か黒か・男か女かというように善悪や区別が二分化されていたけれども、現代は多様な価値観があり、またそれらが認められるべきであるという社会になったと思う。だからこそ、今回取り上げた課題においても異なる世代や立場の人同士で多様な意見を交し合うことが必要だ。そういった意味で今回のワークショップは大変よい機会であった。

神里 氏

参加者にとって簡単な内容ではなかったと思うが、短い時間のなかで大変深い議論がされていた。人類の長い歴史において、ヒトの誕生は精子と卵子が母体内で出会って受精するという偶然性に左右されてきた。それが今や、精子・卵子がなくても、それらを別の体細胞から作り、体外受精させることでヒトを作り出せるかもしれないという時代になった。これはヒトの誕生の概念や家族のあり方など、社会に非常に大きな影響を与えることになる。

簡単に答えが出る課題ではないが、今後も科学の進歩に負けないよう、広く国民一般の議論の蓄積が必要である。今回のような機会を増やし、また参加していただきたい。我々もお手伝いさせていただけたらと思う。

畠 氏

自社において培養皮膚（又は軟骨）を実用化・製品化しようとする、そのリスクと責任に関する課題が次々と出てきた。現在も、新たな開発や臨床を進めていくなかで、新しい課題に直面する日々である。

再生医療の進歩のためには、「研究者は研究をし、一般人はそれを見守る」という構図ではなく、広く国民一般が想像できる範囲の議論を積み重ねていくことが重要である。

今後は、一般の方も再生医療を発展させる専門家の一員として、こうした議論に積極的に参加していただきたい。

